

広報



令和3年3月

2021

第69号

巻頭特集

コロナ禍における 人権問題

福島県 長秀院住職 渡辺祥文

法話

さとりを願う心

教化センター布教師 遠田旭有

被災地のお寺は今

第11回 「青空があるじゃないか―徳泉寺復興―」

令和2年度行事報告

教化資料紹介

令和3年度行事予定



SOTO ZEN

曹洞宗東北管区教化センター

〒981-3117 仙台市泉区市名坂字檜町169-4

TEL.022-218-1381 FAX.022-218-1382

http://soto-tohoku.net/ e-mail:kyouka@seagreen.ocn.ne.jp

巻頭特集

コロナ禍における人権問題

東北管区教化センターでは、コロナ禍における差別、風評や中傷などの人権啓発を目的として、9月に関東管区作成の「誓願」ポスターを管区内寺院へ送付いたしました。10月には宗務庁より「正見」ポスターが全国の宗門寺院へ配布されました。

元人権啓発相談員として長らく宗門の人権問題に取り組んでこられた福島県長秀院住職渡辺祥文老師に、新型コロナウイルス感染症に関する人権問題についてご寄稿いただきました。

私たちの温かい「ことば」や「行い」が
苦しんでいる方がたを支えます

正見

SHOKEN

コロナ禍にあって、この苦境に立ち向かう人々に敬意を表します。他方で罹患者の方々や医療従事者とご家族などに対する誤解と偏見、差別事象や風評被害が引き起こされています。科学的根拠のない不正確な情報、迷信に振り回されることなく、冷静に生活を行っていくことが第一に求められています。私たちに今できる、大切なことはウイルスに留まらず不安と差別の感染予防なのです。

「正見」とはお釈迦様が説かれた八正道の教えの中にある言葉です。八正道が説く8つの大切な教えは、それぞれに個別なものではなく、相互に密接に関係しあいながら、統合され仏教者の正しい生き方を示しています。なかでも、正しい信仰を持つための「正見」は仏教者として思考や行動の基幹となるものです。

このポスターは曹洞宗ネットからダウンロードできます

曹洞宗は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

新型コロナウイルスによる
あらたな差別をなくすために

私たちは
誓願
します

不安に駆られて「他」をきずつけることのないよう
お互いを慈しみあえる社会にすることを誓願します

曹洞宗

巻頭特集

正見―差別的思考の共通性を越えて― 新型コロナウイルス感染症(COVID-19) パンデミック禍の中で



福島県 長秀院住職 渡辺祥文

いま、再び 「正見」に立ち返って

新型コロナウイルス感染症。パンデミックは、世界中の在り方を変えてつづきます。否、全てを変えてしまったのかもしれませんが。

「もしかしたら、大変なことかもしれない」と全国民が、世界の人々が感じたのはいつからだったのでしょうか。現在(令和2年11月)新型コロナウイルスの脅威が毎日報道されるようになり10ヶ月がたちます。ウイルス感染の脅威、闘病の恐怖とともに顕在化した差別事象、そして潜在化したままの不安と不満等が渦巻き、

パンデミック禍の中で

感染予防のため物理的に距離を確保することから、さらに人との距離が離れ分断が加速しているように感じています。

今から10年前の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故から被災地は全て同じ苦しみを現在も抱えています。特に原発事故に関しての苦悩は今も「現在進行形」です。私の住む地区は、原発事故で汚染された土壌等の除染物質を公的に行政側から依頼され、仮々置場として除染物質を保管しています。そして毎日大型トラックが原発近辺の中間貯蔵施設へ向けて大車列となり運搬しているのです。そして今後も最短で4年は続くのです。原発事

故は何も収束していません。

そのような中、2020年(令和2年)年頭、地元福島市においては例年になく熱気と希望を感じていました。新聞地元紙には「さあ、復興五輪の2020年、令和の新しい歩みとともに」等の見出しが掲載され、高揚感が漂っていました。

いろいろな堆積した思いのある福島県民ですが、「それでも！10年目の3月を迎えると聖火がやってくる！」という思いがあったのです。宮城県の仙台空港に聖火が空輸され、サッカー施設Jヴィレッジ(震災・原発事故時は除染の拠点であった)を起点として聖火ランナーが東京の国立競技場を目指し日本中をリレーする、福島県にとっては「復興五輪」の幕開けでした。さらに3月30日には作曲家古関裕而氏をモデルとしたNHK朝の連続テレビ小説『エール』が始まりました。期待が高まりましたが、パンデミックにより全く別世界の様相を呈しました。

感染・闘病の恐怖は勿論ですが、感染者やその家族に対する差別・中傷・嫌がらせ等が顕在化し、医療従事者等の命を賭して感染症と戦っている人々にまでそれが及び、意見の違いによる様々な分断が剥き出しになっています。

いま、再び、改めて10年前にも提示された「正見」に立ち返らなければならぬと強く思います。

ウイルス感染拡大と、 「恐怖」の感染拡大

今回の新型コロナウイルスの世界的パンデミックは、私においても「他人事」ではなかったのです。4月中旬、お世話になりいつも会えばお声をかけて下さる先輩の訃報がもたらされました。新型コロナウイルス感染が判明、3月末に入院、10日ほどで急逝、家族も罹患とのこと、本当に衝撃でした。

その訃報に接した2時間後、当山の役員より報告があり、役員

Mさんの40代の息子さんが罹患し入院、濃厚接触者の家族も自宅待機となったという知らせが入りました。職場のクラスターのための感染でした。

誰が感染発症してもおかしくないのですが、町内や地域社会も、学校関係も、高齢者施設も、病院関係も緊張が一気に高まり、小さな町に戒厳令が敷かれたようでした。

そしてその3日後さらにそのクラスターから、長女の子供である孫娘の通う保育園に感染が及びました。同じ保育園の園児に親から感染し、テレビ画面に保育園の映像が流れニュースとして読み上げられました。保育園は閉鎖され、園児は全員自宅待機になるという、妻が慌てて娘にメールを送りました。すぐ返信が返ってきて、娘も翌日から職場を休み自宅待機になりました。

その後Mさんの息子さんは回復し、保育園の感染は抑え込まれました。

この4月の出来事は、自分や家

族も感染しているのではないかと、という恐怖と焦りが現前しました。また孫の保育園の感染者発生にともなう一時閉園は「自分の孫だけは、娘とその家族だけは守りたい。感染していませんように」と、とつさに血を分けたものだけは守りたいと、正直思ったのです。生物としての人間は、自己の生き残りのみを追求し欲します。極論ですが、生命は必ずこのことを基とします。身近で、いま、ここにウイルスの脅威があるとかると他人事ではなくなる。途端に、ウイルス、発症発病、闘病、死を回避したいという「忌避」の感情に支配されるのです。

一世紀前のスペイン風邪（インフルエンザ）のパンデミックは、流行り病であることは理解できても原因はわからなかったのです。人々は恐れたでしょうが、新聞で昨日のことを初めて知るくらいで、まして多くが自分の生活しているところが世界の全てであり、現代から見れば牧歌的さえあります。百年前は電子顕微鏡

もなく、ウイルスの姿も特定されていませんでした。知らないものは怖くないのです。しかし今は違う。情報も世界がほぼ同時に共有し、原因も分析され、新型コロナウイルスと特定されました。但し、特効薬もワクチンもない、テレビに映る知名度の高い人も亡くなり致死性が高いらしいと恐怖が増幅されました。

「人の口に戸は立てられない」と言いますが、あつという間に情報が流れ地域社会が引き攣る。福島市内の感染発症者も、当然テレビ・新聞でもプライバシーは秘匿されていましたが、人口28万5千人の福島市でもどこの誰かというのが2、3日で伝わってしまふ。さらにネットに似非情報^{えせ}が蔓延し、悪意に満ちた扇動も始まる。テレビ情報が主の情報源である高齢者は、テレビのワイドショーのエンターテイメント化された議論の中継により、何を信じて良いかわからなくなり混乱と不安に苛まれている。地域の芋煮会を行うかどうかで地域が

まっ二つに割れてしまうこともありました。

ウイルスの感染拡大は勿論のこと、そこから生まれる「恐怖」というものの感染の拡大が忌避の感情をさらに増幅拡大するのです。忌避の感情は、差別という排除と抑圧を生む。恐怖は人間の生存のため、自己防衛のための大事なものでもあります。しかし一方、怖れは、避けることを第一義とし、突然不意に眼前に現れれば抑圧し排除する方向に走り、差別も剥き出しになるのです。

私自身も、新型コロナウイルスが身近に迫り、ただ焦り、忌避し逃げようとする感情に支配されたのです。自分自身これまでの感染症と宗教による差別の歴史を学んできたはずなのに、危機が身近に迫ると自らの感情に負け、理念・理想が吹っ飛んでしまうのです。それは、人間の、そして私自身の現実であり、本性であり、煩惱です。そこを正面から見つめることが第一歩ではないでしょうか。

巻頭特集

「放射能が感染らないように」
「来てもらいたくない」

今だから話せることもありま
す。東日本大震災・原電事故の年
も特派布教は東北の一部を除き
行われました。私も辞令を頂き派
遣地へ赴きました。お迎えを受け
特派会場の御寺院様に到着し控
室に通されました。すると隣の部
屋から大きな話し声が聞こえて
きました。
「今日の布教師さん、福島からだ
そうだ」
「ウツワー、勘弁してくれ。たまっ
たもんじゃない」
「放射線出てるんじゃないのか」
「放射能感染るんじゃないのか」
「そういう人には来てもらいたく
ないな、本当に」
大きな笑い声が響きました。
この会話は、原発事故直後の当
該地を生きていた私自身にとつ
て、身体中の血管が怒張する感覚
に襲われ、今も忘れられません。
人が集まると、子供でも大人でも

「悪乗り」と「ウケねらい」で面
白可笑しくしようとしています。人間
は集団になるときわめて攻撃的
になるのです。それは自分自身を
含めてみな同じように持つてい
ます。非常時・緊急時と言われる
時ほど激しく剥き出しになるも
のです。

忌避と差別(抑圧と排除)
からの脱却と啓発を
正見という視座に立って

私たちには恐れ忌避する心が内
在しています。自分可愛さが露出
し他を抑圧・排除し、差別的言動
に付和雷同する。僧侶とて同じで
す。ただ僧侶という仏教者である
からこそ、死の本質を見極め道元
禅師がひたすら説く「観無常」を
座標に据え、差別や偏見に苦しん
でいる人が多くいる現実を直視し、
菩薩行を生きがいとしたい。人は
みなすべて孤独である。しかし孤
立してはならないし孤立させても
ならない。分断の先には、増幅さ

れた忌避と差別が渦巻きます。私
たち僧侶は、寺族は、檀信徒は、
忌避と差別に与してはなりません。
忌避と差別の蔓延から脱却するた
めの啓発をする側の人々にならな
ければなりません。

このとき、
今だからこそ

新型コロナウイルスのパンデミック
は、人類史上においては当たり前
のものです。今後人類が生存す
る限り新たなパンデミックが襲
来します。誤解を恐れずに言え
ば、諸行無常の中に当然含まれて
いる。自然の中に含まれているこ
とです。ただ、いま、この時に出
会い我々が驚愕し恐怖している。
やがては新型コロナウイルスも
収束・終息を見るでしょうが、全
世界全人類にとってこれからが
正念場といえましょう。これだけ
医学が発達しても、人の流れが
グローバル化していると防げな
い。ロックダウン等の防疫学的な

方法の実施は経済の大失速を招
き、どのように回復すべきなのか
手探りです。社会の形態や在り方
も元の形には戻れないでしょう。

だからこのような時こそ、僧侶
の働き時であり働き所です。不安
や苦悩が頂点の時こそ寄り添い
伴走する人が求められます。3密
を避け、ソーシャルディスタンス
を守りながら、正見という視座に
立ち、「和顔愛語」の実践です。「四
摂法」は型にはまったものではな
い、それぞれの場所において、悩み
ともに呻吟しながら歩くことに
徹するしかありません。今は何所
にも避難場所などないのです。

「アフターコロナ」「ウィズコロ
ナ」は、人と人の物理的距離が遠
くなることですが、人の心と心は
近くなければなりません。瑩山禅
師は「たとい難値難遇の事あると
も必ず和合和睦の思いを生ずべ
し」(『洞谷記』)と示しています。
これを指標としてまいりたいと
自ら誓願するところです。

統監あいさつ



コロナ禍下の教化

曹洞宗東北管区教化センター 統監 高橋 哲 秋

新型コロナウイルスの猛威は全世界に及び、各地で緊急事態宣言が発令されるなどして、私たちの日常生活に大きな変化をもたらしました。

緊急事態宣言発令の下、観光地や繁華街から人はいなくなり、感染防止と経済活動の折り合いを探っています。

地域社会にあっても祭りや会合の中止が相次ぎ、感染拡大防止に努める反面、経済の活性化を図り人々の心に活気を取り戻すための工夫が行われています。ご寺院におかれましても、試行錯誤しながら3密（密閉・密集・密接）回避や消毒の徹底、供養膳の取りやめなど、葬儀法事や恒期法要などの規模縮小をやむなくされていると存じます。東日本大震災より満10年を目前の現在、その後の度重なる自然災害からの復興と被災者の心に寄り添っておられる最中、疫病感染予防に努めておられる管区内ご寺院諸老師、寺族の皆様

および関係各位にお見舞い申し上げます。

宗務庁からは昨年6月25日に「新型コロナウイルス感染症に対する各種法要執行の基本指針」が出され、3密を避け、マスク着用、手指の消毒などの基本的対策の徹底と可能な範囲で会食を避けることなどが示されました。

また、宗報10月号には「正見」ポスターが同封され、感染症に関わる不安と差別の感染予防を呼びかけています。

これに先立ち9月に、当教化センターでも関東管区で作成した「新型コロナウイルスによるあらたな差別をなくすために――誓願――」のポスターを東北管区内ご寺院にお配りしております。教化集団を標榜する宗門においても、特派布教をはじめ、ほとんどの集会は中止されました。宗務行政においても各種会合の中止やテレワークなどの勤務体

制の導入やパソコンによるオンライン会議等を取り入れております。

東北管区では、寺族研修会や人権研修会をはじめ、ほとんどの会合を取りやめています。

東北管区教化センターにおいても、一般対象の「禅をきく会」「教化フォーラム」「坐禅ナイト」、宗侶対象の「布教講習会」「教化指導員研修会」および「婦人会東北管区研修会」、さらには各種協議会や会議など、ほとんどの事業を中止せざるを得ませんでした。

本年度の告諭では「誰一人として取り残されることのない世界を見据え、ともに学び、考え、実践する」ことが示され、布教教化方針では、菩薩行の実践と寺院を地域社会の縁を深める場とすることを指針としています。近年、「直葬」とか「墓じまい」など寺院離れの傾向がみられますが、更にコロナ禍の昨今、近

親者だけの葬儀や法事が当然のように執行されています。

感染症予防のために葬儀法事などの仏事も3密を避け、少人数で行うのもやむをえません。しかし、「個人にとつての効果」が優先され、家族共同体と人間関係の崩壊がささやかれる現代であり、近い将来の先祖離れが危惧されます。「因縁所生している時空の中で生かされている自分」を理解していただく教化が望まれます。

私たちの教化活動の根本は、「一仏両祖」のもと、「禅戒一如・修証不二」の実践にあります。そのためには地域共同体崩壊の歯止めとなるべき寺院の役割をいかに果たしていくかが問われています。

来年度は、感染状況に十分配慮しながら、オンラインの活用、または間合い（ソーシャルディスタンス）の確保やマスク装着と消毒の徹底をはかり、諸事業を行う予定でありますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

（岩手県 遠應寺住職）

法 話 「修証義 第二十節」



さとりを願う心

曹洞宗東北管区教化センター布教師 遠田 旭 有

若し菩提心を発して後、六趣四生に輪転すと雖も、其輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば従来の光陰は設い空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて発願すべし設い仏に成るべき功德熟して円満すべしといふとも、尚お廻らして衆生の成仏得道に回向するなり
或は無量劫行いて衆生を先に度して自からは終に仏に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり

菩提心とは「さとりを願う心」のことを言います。すべての生あるものを「衆生」といい、衆生は六趣に住み、その生れ方には四つあるとされます。そこで「六趣四生に輪転」は「六つのどこかに四つの生れ方のいずれかで生まれて、生死を繰り返す」ことを表します。自分も生あるものであるのは当然ですが、それだけでなく、他の生あるものから離れては存在しないことも暗に含んでいます。さとりを願う心は、自分も含む生あるものとは切り離せないこと、生あるものが住む所でこそその心をおこすことを言っているのです。そして、「そこは観念の世界ではなく、「今生」という今こうして在る現在を指します。

今現在に菩提心をおこしたならば、今の生の営みのすべてがさとの行願になるとされます。ちなみに「行願」とは願いとその実践を言います。
ところで、菩提心をおこすことについて道元禪師は、「菩提心をおこすとは、自分が救われることよりも他の生あるものが救われることを願う、それに励むことである」と仰っています。そうすると、ここでいう菩提心、つまりさとりを願う心とは、「自分のさとり」ではなく、「他の生あるものさとり」を願う心になります。ですが、「自分」も生あるものに含まれますから、敢えて外さなくとも、「自分」も含めたすべての生あるものさとりを願う心と言ってよいでしょう。

そうすると、さとりの行願とは、すべての生あるものがさとりを得るようお願い、その為実践することとなります。

しかし、ここで疑問が起ります。どうして、「自分が救われることだけでなく、すべての生あるものが救われることを願う励むこと」がさとりの心となるのでしょうか。

道元禪師はお釈迦様の修行の様子を「少しの間も怠けることなく励まれた」と讃嘆しておられます。

そしてさとりを開かれた後のお釈迦様の生涯をこのようにも称えておられます。「一時も独りでいることなく、常に誰かに教えを伝えられた」「生あるものを導き続けられた一生」であると。お釈迦様の生涯は生あるものを救うことに費やされたというのです。

「すべての生あるものさとりを願う励むことがさとりの心」というのは、お釈迦様のこうした生き方によるものなのです。仮にお釈迦様がさとられた後に、自分本位の生活を送られていたならば、菩提心とは自分本位に生きることを願う心である

となつたことでしょうか。
菩提心をおこした人が生あるものを救うということは、欲望を満足させることではないとも道元禪師は戒めておられます。

お釈迦様は生あるものを救う為に、仏の教えを伝えてさとらせることで苦しみを抜かれました。菩提心をおこした人が、生あるものに利益を与えるとは、仏の教えを説き、生きる苦悩を除くことを言うのです。

お釈迦様はさとつた後もお袈裟を着けたり、ご飯を頂いたりすることなどの営みすべてを修行として続けられました。その根底には、すべての生あるものさとり、つまり心の平安を願うお心があったのです。まさに菩提心をおこしたことで、すべてがさとりの行願となられたのです。そのような様子こそ真に心の平安を保つ生き方のお手本であります。

お釈迦様のような心の平安を願うならば、仏教を学び、説法を聞き、坐禅をする際には、すべての生あるものさとりを願う心、菩提心をおこして行うことが肝要なのです。

(山形県 秀林寺住職)

シリーズ「被災地のお寺は今」第 11 回

青空があるじゃないかー徳泉寺復興ー

宮城県 徳泉寺・徳本寺住職 早坂文明



【参考】

・宮城県山元町・県最南端 福島県に隣接 東京電力福島第一原子力発電所より60km

東西6.5km×南北11.9kmの長方形のほぼ平らな地形 東側は全て海岸線

・津波：最大波12.2m 最浸水は内陸へ3km 町全体の37.2%が浸水 全世帯の52.4%が浸水被害

・徳本寺：山元町内の内陸高台のため浸水被害なし 本堂壁は全て落ちた 沿岸部にあった墓地は壊滅で内陸に移転 犠牲者は143人

・徳泉寺：徳本寺の末寺 同町内で海岸より300mに位置 伽藍等すべて流出 墓地は砂で埋まる 犠牲者は74人

2011年3月11日

その日は、徳泉寺の檀家総会が13時30分より開催された。14時30分頃に閉会し役員さんと後片付け中に、震度6強・マグネチュード9.0の東日本大震災発生。6mの津波が来るとの情報。後片付けを中断して全員帰宅。私は本務地徳本寺に車で向か

う。到着して間もなく、町に津波が襲来。

一週間後

3月18日やっと徳泉寺跡に辿り着いた。土台だけを残し何もかもない。瓦礫すらなく、白い砂浜状態。恨めしいほどの青空が広がっていた。「何だ、青空があるじゃないか!」と思わずつぶやいた。当時それは何の慰めにもならない言葉だった。

一カ月後

4月3日避難所住まいの檀家のSさんが、新聞紙にくるんだ仏像を届けてきた。自分の屋敷内(寺から2kmほどの距離)に置いてあったという。確かに徳泉寺の本尊釈迦如来だ。高さ30cmほどの木製座像。金箔が剥げるなど多少の傷はあるものの、瓦礫にも押し潰されず、奇跡としか言いようがなかった。

この頃徳本寺の位牌堂には、墓地壊滅のために納骨できない両寺の犠牲者遺骨が次々安置されていた。そこに奇跡の本尊も仮安置した。そして、どんな災難に遭っても、みなさんの拠り所になるという一心で踏み止まったものと信じて「一心本尊」と名付けた。

一年後

寺の周りは災害危険区域になる。ほとんどの檀家さんが、家屋敷を失い、元のところに戻れなくなった。寺を再建しようにも、檀家さんの力を頼ることはできない。そう腹をくくった時、「はがき一文字写経」による復興という、夢物語が頭に浮か



徳泉寺跡地

んだ。一心本尊にかけて、一心に一文字をはがきに写経して送ってもらうことを全国に呼びかけるのだ。納経料は一口5千円。納経者には一心本尊を刻印した金属製の護身符を授与する。

このことを両寺合同の震災物故者一周忌法要(2012年3月11日)の折に宣言した。その時ある縁により永六輔さんが出でになり、ご遺族にお話をしてくださった。徳本寺本堂・境内に5百人を超える方が集まっていた。

納経者第一号

法要2日後の3月13日には、一通の「はがき一文字写経」が届いた。何と永六輔さんからだ。その一文字は「六」、「南無阿弥陀仏 六字の名号」と書き添えて。この時、夢物語は実現する予感がした。というより、

一心本尊と犠牲者遺骨



できなかつたら、永さんに顔向けができない。何としても実現しなければと、二度目の腹をくくった。

二つの歌

震災間もない頃、山形県松林寺住職三部義道師より、「まけないタオル」という被災者支援活動の呼びかけがあった。短くて首にも頭にも巻けないけど、震災にも負けないというユニークなタオルを配布して、被災者を和ませたいという。それなら歌を作って広めようと提案した。私が作詞し、作曲は賛同者の一人である歌う尼さんのやなせなさんに依頼した。彼女が全国で歌って、その活動は広がった。8万5千枚を超えるタオルを配布できたのである。

歌には力がある。まさに「歌力発電」だ。電気は発せなくても、元気を興すことができる。そう確信して、「はがき一文字写経」のイメージソング「ひとつの心」も作詞し、やなせさんに作曲と歌をお願いした。彼女の歌と写経への呼びかけで、全国から一文字写経が届けられた。

また「まけないタオル」との相乗効果もあり、やなせさんのコンサートに併せて、作詞者の話も聞きたいということ、全国10カ所以上のところで彼女と共演する機会があった。思いがけない写経勧進の広がりとなった。

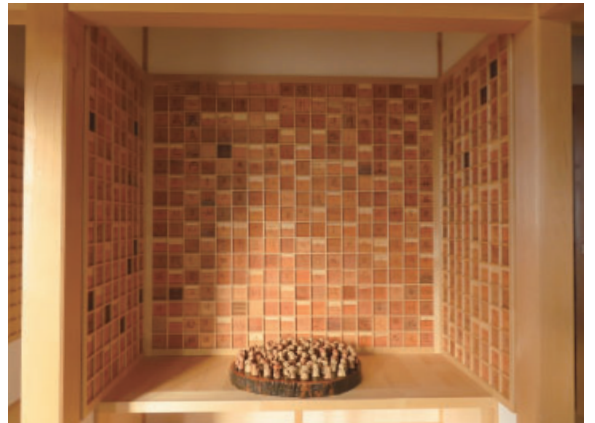
田舎寺の一住職の発信力などかか知れている。永さんの一言、やなせさんの一曲は、百万語にも匹敵す

る影響力がある。更に夢物語に関心を示すメディアの力にも支えられ、復興へ真一文字に向かうことができた。

二つの恩返し

全国47すべての都道府県の方から納経された写経は2千枚を超えて、徳泉寺は復興した。写経のはがきはファイルして、一心本尊さまの下に納経した。ほとんどの方は徳泉寺の「と」の字も知らずに、復興を願って一心に写経して下さった。その尊い志に如何に応えるべきか思案し、「一心本尊」の脇侍として本堂に掲示し顕彰することにした。杉戸絵にヒントを得て、杉板に写経をそのままレーザーによって焼き付けた。杉板は主に大本山永平寺より下賜された倒木した五代杉から起こした木片である。それを棧木に納めて襖絵のように掲示した。一文字写経が永代に、みなさんに手を合わせていただけたら、せめても恩返しになるのではと願っている。

また全国の納経いただいた方に、復興したという事実をきちんとお伝えすることも、更なる恩返しだろうと、復興記録誌の製作に思い至った。そして、クラウドファンディングに挑戦した。望外の反響があり目標額を大幅に超えて、『青空があるじゃないかー徳泉寺復興誌』を刊行し、納経者一人ひとりのお手元にお届けできた。



写経掲示

5DAYS

苦節九年、2020年3月11日、15日「復興感謝祭5DAYS」を開催し、復興への感謝を広く世間にお伝えした。落慶法要を皮切りにやなせななコンサート・古謝美佐子コンサート・写経会・坐禅会・ボランティア活動・テレホン法話ライブを行った。折しも新型コロナウイルス感染症が懸念され始めた。それでも檀家さんはじめ復興を心待ちにしてこられた全国の方に、整った姿を披露するのは、このタイミングしかないだろうと、二度目の腹をくくった。おかげさまで県内外から数百人が訪れ、全日程を無事円成できた。この催しによって、「復興のその先へ」向かう道筋を示せた気がする。今後この寺で、人々

の心の青空を広げるため微力を尽くして、三つ目の恩返しとしたい。



徳泉寺外観



本堂内

令和2年度 行事報告

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止といたしました。

布教講習会

・期日 10月27日～28日 中止

教化指導員研修会

・期日 7月9日 延期 ↓ 11月19日 最終的に中止

曹洞宗婦人会東北管区研修会

・会場 岩手県花巻温泉 ホテル千秋閣
・期日 6月30日～7月1日 中止(令和3年度へ延期)

坐禅ナイト2020春

・会場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス
・期日 第1回 5月12日(火) 中止
第2回 5月19日(火) 中止
第3回 5月26日(火) 中止

坐禅ナイト2020秋

・会場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス
・期日 第1回 11月10日(火) 中止
第2回 11月17日(火) 中止
第3回 11月24日(火) 中止

第53回教化フォーラム

・期日 9月10日 中止(令和3年度へ延期)

特派布教と青森伝道車巡回布教

・期日 6月19日～27日 中止

令和2年度禅をきく会

- ・会場 宮城県楽楽ホール
- ・期日 第172回 6月3日(水) 中止
相原昇明 老師
- ・元曹洞宗特派布教師・静岡県成願寺住職
- ・期日 第173回 8月26日(水) 中止
盛田正孝 老師
- 岩手県正法寺専門僧堂堂長
- ・期日 第174回 10月8日(木) 中止
やなせなな さん
- 浄土真宗本願寺派・奈良県教恩寺住職
- ・期日 第175回 12月1日(火) 中止
早坂文明 老師
- 前東北管区教化センター統監 宮城県徳本寺・徳泉寺住職
- ・期日 第176回 令和3年2月2日(火) 中止
青山俊董 老師
- 愛知専門尼僧堂堂長

教化資料紹介

お別れの言葉カード「言の葉」

「お伝えしたい思いをお書きください」

グリーンケアや癒しを目的として、檀信徒向けに作成したお別れの言葉カード「言の葉」。

枕経や入棺時に遺族にお渡しし故人への想いを綴って頂き棺に納めます。

お地藏様と観音様の手紙カードが各1枚、言の葉の由縁でもある菩提樹の葉型手紙カードが6色6枚、合計8枚1組でお届けいたします。



「心の柱」私のよりどころ

「心の柱」は、「毎日読む経典」＋「書いて残せるノート」です。

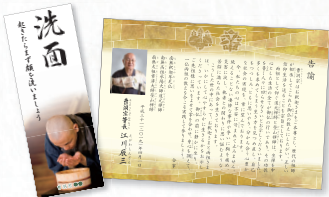
人生をよりよく生きるために、心のよりどころを持つことをお勧めするものです。



「柱。ポスター」

檀信徒の方々へ告諭の敷衍を願い、平成30年度は「坐禅」を、令和元年度は「洗面」をとりあげました。

「坐禅を中心とした生活の全てが御仏の行いである」というお諭しから、朝起きたらまず顔を洗い、それか



ら仏壇に手を合わせ、食事をいただく、そうすれば生活の全てが御仏の行いとなります。ポスターを眼のつく場所に掲げて日々の心の柱に活かしていただき、家族みんなでつとめていただけるよう作成しました。

告諭（令和元年度）を中面に配した畳紙（たとうし）とのセットでお届けいたします。

それぞれ教化資料として、ぜひご活用ください。

（資料は無料ですが、送料をご負担いただきます）

※教化資料は宗務庁の方針により、令和3年度から宗務庁で一括して制作することとなりました。

新任教化センター布教師



浅山 賢正 師 儒童寺副住職
青森県 第7教区 93番

令和3年度 行事予定

■ 禅をきく会

※本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンラインでの開催になります。詳細はセンターのホームページをご覧ください。

第172回 4月27日(火) 正午 配信開始

曹洞宗特派布教師・栃木県明林寺住職 西田 正法 老師
「老いを生きる」～白秋・玄冬の生き方

第173回 6月15日(火) 正午 配信開始

元曹洞宗特派布教師・静岡県成願寺住職 相原 昇明 老師
「修証義に学ぶ」

第174回 9月14日(火) 正午 配信開始

岩手県正法寺専門僧堂堂長 盛田 正孝 老師
「禅に学ぶ生き方」

第175回 10月19日(火) 正午 配信開始

浄土真宗本願寺派・奈良県教恩寺住職 シンガーソングライター やなせなな さん
「悲しみの先に開かれる世界」～歌う尼さん法話コンサート

第176回 12月21日(火) 正午 配信開始

前東北管区教化センター統監・宮城県徳本寺・徳泉寺住職 早坂 文明 老師
ピアノ 伊藤 智哉 氏
御詠歌 岡崎るみ子 氏
「テレホン法話ライブ」復興に真一文字」
～「はがき一文字写経」による復興の足跡～

第177回 令和4年 2月15日(火) 正午 配信開始

学校法人梅檀学園 東北福祉大学学長 千葉 公慈 老師
「涅槃会に想う」～沙羅の林の物語～

■ 教化指導員研修会

・期日 7月1日(木)
・会場 ホテルモントレ仙台

■ 布教講習会

・期日 11月18日(木)～19日(金)
・会場 ホテルモントレ仙台

■ 坐禅ナイト

・期日 2021秋
11月2・9・16日(全3回)
・会場 東北福祉大学東口キャンパス 予定
午後7時～午後9時

※新型コロナウイルスの状況によっては、中止や延期もございます。



曹洞宗東北管区教化センターテレフォン法話 心の電話

24時間
年中無休

フ・イ・ヤ・ヨ・シ・ヨ・シ
022-218-4444